

氏名(本籍) 田島容子(東京都)
 学位の種類 学術博士
 学位記番号 博音第11号
 学位授与年月日 平成2年3月26日
 学位論文等題目 (作品・曲目等) 「17世紀ヴェネツィア・オペラに関する一考察」
 (論文) 「17世紀ヴェネツィア・オペラに関する一考察—ヴェネツィア社会とオペラの変質」

論文等審査委員

〈作品・演奏〉

(主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	瀬山真寿子
(副査)	〃	教授	(〃)	高木浩子
(〃)	〃	助教授	(〃)	峰村貞子
(〃)	〃	教授	(〃)	角倉一朗
(〃)	〃	助教授	(〃)	土田英三郎
(〃)	〃	講師	(〃)	松村禎三
(〃)	武蔵野音楽大学	助教授	(〃)	三池三郎

〈論文〉

(主査)	東京芸術大学	教授	(音楽学部)	角倉一朗
(副査)	〃	教授	(〃)	松山隆
(〃)	〃	助教授	(〃)	土田英三郎
(〃)	〃	教授	(〃)	瀬山真寿子
(〃)	〃	教授	(〃)	高木浩子
(〃)	〃	助教授	(〃)	峰村貞子
(〃)	〃	講師	(〃)	松村禎三

副題の示す通り、本論文は17世紀のヴェネツィア社会を媒体としたオペラの変質について考察を試みたものである。ギリシア悲劇の復興から出発したカメラータの表現原理は、その展開と応用の過程でレチタティーヴォ様式を生み、このレチタティーヴォによるオペラは、各地宮廷の祝祭に権力の具象化の一手段として華々しく上演された。しかしこれらの貴族的なオペラは、その様式美と高度の文学性により、民衆の魂や一般の生活からはるかに離れた王侯の娯楽にすぎない。

しかしオペラが1637年、ヴェネツィア共和国にもたらされた時より状況は大きく変化する。オペラ上演の成功は、将来の経済的展望を模索する市内富裕層の強い関心をひきつけ、劇場の新設と共に効率的な興行機構がこの地に確立する。1640年代よりオペラは単なる祝祭演劇の位置から、投資の対象へと変化し、劇場は最新の娯楽場として市民生活に定着する。この結果17世紀の末までに16劇場が営業を行い、約370本にのぼるオペラ作品が市内で上演された。このため人文主義的な教養を重視する君侯のオペラに対し、収益率を重視して制作されたヴェネツィア・オペラは、脚本内容と音楽構造に関し大きな変質を示し、17世紀末には粗製乱造を原因として衰退をみることとなる。

絶対君主制の台頭する17世紀の西欧において、芸術が一部の特権層の専有物としてではなく、市民の嗜好と需要を基に制作された例は極めて希有なものであり、興味深いテーマと考えられる。そこで本論文では以下の項目に対して分析を試み、変質の様相とその要因を観察するものである。

- ヴェネツィア社会の様相
- ヴェネツィア・オペラの文化的背景（演劇の特性、劇と音楽の結合の試み）
- 上演の実際（劇場と運営方式、脚本、スペクタクル要素、合唱、アリア）

大規模な祝祭を維持運営する宮廷を持たないヴェネツィア共和国は、オペラの上演を合理的なシステムと利潤追求を目的とする一群の企業家の手にゆだねる。この中で生まれた興行の仕組み、有料公開劇場、重層機敷席、機械仕掛けと舞台転換の機構、緞帳、プロセニウム・アーチ、オケストラ・ピットなどはオペラが豪華な娯楽として各地に伝播する上で大きな役割を果たしている。しかし一方で1650年代より観察されるオペラの質的な変化→合唱の削減やレチタティーヴォの減少、アリアへの偏重とアリアの長大化は、劇の統一感を疎外し、上演が歌手の技巧と見せ場の連結に終止する危険を大きくはら

むこととなる。

特に 1660 年代より明白となる幕中への挿入アリア、一幕に 20 回も設定される場面転換、機械仕掛けの多用は、オペラがきらびやかな舞台効果とアリア、スペクタクル・シーンの強調に終る弊害を招き、1670 年以降、上演ははげしい情感と歌手の技巧、過度な刺激性を盛りこんだ大衆演劇へと変化していく。

その最も顕著な例は、脚本構造とアリアの形態に表れ、声楽家としてこの変化の過程は極めて重視される問題である。

そこで本論は特に脚本とアリアの変質を中心に種々の角度から、17 世紀ヴェネツィアのオペラを考察し、演

奏の参考にするべく、その結果を記述した。社会とオペラの関連性について考える作業は、西欧の音楽の本質を把握する上で必要なものと確信している。なぜなら、演奏の様式や装飾法、管弦楽の規模、脚本の文学性などは、その芸術を維持し、育成する社会の需要に応じて生れたものであり、社会を知ることは、音楽の時代様式をとらえることに役立つ。

フィレンツェに生れた新しい音楽芸術は、誕生後、約 50 年で大きく姿を変え、近代オペラの基本型を呈することとなる。この 17 世紀中のオペラの変質を概観し、正確な演奏に役立てることが、本論の目的である。